『部落解放研究』 広島部落解放研究所　27号　2020年　117 - 139頁

朝鮮戦争と2つの家族
――個人の歴史的経験と意識の変容

安　　錦珠

Ⅰ はじめに

マイクロソフト社が1981年にMS-DOSを、1995年にwindows95を世に出すなど、この40年間、IT世界は、私たちの生活に入り込み、急速な時代変化を遂げてきた。その変化は、私たちの生活を大きく変えた。しかしそれは、個人がそれについていけるかどうかはともかく、私たちの生と死に直結した問題ではない。

IT世界の急速な変化を超え、もう一つの急激な時代の変化がある。20世紀の現代史がそれである。20世紀に入り、２度の世界大戦により世界は大きく破壊され、その後は、目まぐるしい経済の成長をみた。

朝鮮半島は、国権を奪われて35年間に及ぶ日本の植民地支配を受けた。そして日本は、戦争で敗北して朝鮮半島から撤退した。しかし朝鮮半島は、今度は民族分断という災禍に見舞われた。朝鮮半島は、米・ソという列強による覇権争いの前線として分断され、ふたたび戦場と化した。1948年に、朝鮮半島の真ん中に位置する38度線の南では大韓民国（以下、韓国）と北では朝鮮民主主義人民共和国(以下、北朝鮮)という政府がそれぞれ樹立され、1950年６月25日、ついに民族同士が殺し合う朝鮮戦争が起こった。朝鮮半島は、冷戦という戦争の主戦場となった。日本の植民地支配を受けた人々が、日本の撤退に喜ぶ間もなく、南北に引き裂かれて、列強の冷戦の犠牲となり、民族同士が殺し合う戦場となった。そしてその後、「休戦」の時の戦線が「軍事境界線」となって、70年近くも引き裂かれたまま、世界で唯一の分断国家となっている。

本稿は、そのように特異な歴史的経験が、朝鮮半島で生きてきた人々にどのような人生を強い、どのような意味を与えたのかに関心を寄せ、その歴史を生きた個人の生活史の一端を、個人と周囲の人々への聞き取りおよび関連資料により再現し、一つの資料的な聞き取りノートとする。そのためⅡでは、調査対象者と関連資料について紹介する。Ⅲでは、調査対象者の経験を歴史

的出来事の中で時系列的に綴る。Ⅳでは、歴史的経験が調査対象者の生活史と意識に及ぼした影響について綴る。

Ⅱ　調査対象者と資料

1　調査対象者

ここでの調査対象者は、1930年に平安南道の安州で生まれ、2007年に仁川で他界した筆者の父ギホン（以下、ギホンまたは父）である。ギホンの世代は、日本の植民地支配と朝鮮戦争という、前者は国家が蹂躙される苦難、後者は民族同士が相争う苦難という、近現代朝鮮の大きな事件を生きた世代である。この双方を経験し、なお生きた人々はすでに高齢となっている。戦後75年を経過し、彼／彼女らの記憶は薄れ、その整合性も欠けざるをえない。

ギホンは、15歳の時に、日本が植民地支配を止めて撤退していく様子を見た。20歳の時に、朝鮮戦争に参戦した。彼は、２つの歴史的出来事のただ中にいた。しかし彼は、すでに他界している。ゆえに、本人から話を聞くことができず、聞き取りは、筆者の記憶と、父の周辺の人々、資料により補充するしかない。

本稿は、自分の父の生活史であるが、どこまでも客観的に記述することに努めた。父の周囲の人で名前が分かる人は姓と名を併記した。調査対象者である父は、「アン・ギホン」の「ギホン」（名）だけ記すことにした。

表は、ギホンの個人史と歴史的出来事を記した年表である。

＜表＞ギホンの略年表

年度	ギホンの個人史		歴史的事実	
	月日	内　容	月日	内　容
1902年	7月	祖父ジェセン誕生		
1910年			8月	日韓併合
1930年	7月	父ギホン誕生		
1935年		祖父ジェセン収監される (1935～1938年)		
1939年			7月	朝鮮半島で国民徴用令実施
1940年				創氏改名
1942年	(？)	旧制中学校に進学		
1943年	(？)	旧制中学を中退	12月	カイロ宣言―朝鮮の独立を保証

1945年			7月	ポツダム宣言。朝鮮の独立を再確認
			8/15	日本の降伏。朝鮮半島の解放軍事的便宜により38度線で米ソの分割占領
			12月	米・英・ソのモスクワ三国外相会議―韓半島で5年の信託統治協議。
1948年	(?)	結婚（後に二人の息子に恵まれる）	5月	南だけ選挙実施
			8月	南で大韓民国政府の樹立
			9月	北で朝鮮民主主義人民共和国
1950年			6/25	朝鮮戦争の挑発　▼
			7/27	仁川上陸作戦
			8/18	韓国政府機関を釜山に移設
			9/26	ソウル修復後、北進　▲
			10/16	中共の「義勇軍」20万名
			12月	平壌が共産軍に。「12月後退」▼
1951年	(?)	反共運動、遊撃隊への入隊	1/4	北軍のソウル占領。「1·4後退」
			2/10	国連空軍の攻撃で仁川奪還▲
			4/11	マッカーサーの解任。戦争は激烈で、膠着状態。▼▲
			6/23	ソ連の国連代表が休戦問題を提起
1952年			6月	新国連司令官の任命（クラーク）。会談再開の戦略として新たな攻撃開始。▼▲
			11月	米大統領に共和党のアイゼンハワーが当選し、公約として停戦を打ち出す。
1953年	冬	越南を試みるが、断念	3月	スターリン死亡後、共産側から休戦会談の再開を提議
			7/11	李承晩が休戦に同意
1955年	(?)	越南		
1957年	(?)	再婚（4女1男に恵まれる）		
1965年			6月	日韓基本条約で国交回復
1980年	8月	親戚と再会		
1983年			6月	国営ＫＢＳで『誰かこの人を知りませんか？』放送始める
1993年			12月	「韓国遊撃軍戦友会総連合会」を組織

2000年			6月	第1次南北正常会談（金大中）
2003年			12月	『韓国戦争の遊撃戦士』発行
2007年	4月	死去		

（この表は、筆者がネットの『民族文化大百科』を参照し、筆者が時系列的に整理したものである。）
▼戦線の南下、▲戦線の北進、▼▲戦争の激化

2　資料

(1) 筆者の記憶

父は、植民地時代に、今は北朝鮮に属する安州で生まれ、朝鮮戦争後に越南した人である。本稿は、その父が生きた足跡を、聞き取りと資料により辿る。

筆者が父から直接聞いた話は多くはなく、母や親戚から聞いた話と照合した。また、資料『韓国戦争の遊撃戦士』により地理や時代状況を参照し、父の生活史を系列的に記述することに努めた。その資料は、韓国政府が、父が朝鮮戦争中に連合軍の遊撃隊に入ったことを認めた、その後の2003年に発行された。父の生活史を記述するに際しては、「なぜ父はそのような経験をしなければならなかったのか」という問いを抱きながら、その背景を詳しく説明することに努めた。

父から直接聞いたことは多くはなかったが、筆者が父の最愛の娘として父と親しい関係にあったこと、筆者が小学6年生の時に、「韓国（朝鮮）戦争の経験談を語る」という学校の宿題で父が経験を語ってくれた記憶は鮮明である。また、父といっしょに朝鮮戦争の遊撃隊に入った人の話も、父の生活史の構成に役立った。祖父ジェセンのことは父から聞いていた。韓国では2000年頃、金大中政権が、植民地清算という名目で、朝鮮民族のために協力した無名の人々を探していた。その時、日本で暮らす筆者は、父から「日本支配の時期にジェセンが3年間収監された。その時の裁判記録を日本で探すことができないか」という相談を受けた。そして父は、祖父ジェセンや父の当時の様子を話してくれた。

しかし、筆者の記憶は父や母、親戚の話からなるもので、その語りは主観的で、それを記述する筆者の記憶も主観的である。ゆえに、客観的に記述するには限界がある。そのずれは認めざるをえない。しかしそれでも、それらの語りと記憶は、時代の真実を垣間見るには充分である。そもそも個人の経験と意識は、本人や他者の主観を通して構築されるものであることも、否定

できない。

(2)『韓国戦争[1]の遊撃戦士』

『韓国戦争の遊撃戦士』は、2003年に、韓国の国防部軍事編纂研究所によって刊行された。それまで遊撃部隊に関する記録は、まとまった記録がなく、当事者の断片的な記録があっただけである。1980年代半ばに、アメリカで資料が一部公開され、遊撃隊に関わった米軍の経験者によりそのことが紹介されたが、その大半が証言によるもので、本格的な記録の収集は行われなかった。その後、韓国戦争50周年を迎えて、韓国の国防部で散発していた資料を集めて編まれたのが、本書である。ギホンの個人史において、朝鮮戦争は大きな部分を占めている。ギホンの経験を理解するためには、朝鮮戦争についての理解がどうしても必要となるので、Ⅲ章2節では、ギホンの生活史に沿いながら本書の説明を紹介する。

3　分析対象と調査方法

本稿では、上述のように筆者の記憶を記述の縦軸とする。また、父の遊撃隊の時代を描く資料として『韓国戦争の遊撃戦士』を用いる。さらに、父が残した日記やメモ類[2]、家族や親族の記憶、父と同じ村出身の遊撃隊員であったHさんの語りを用いる。そして、父の歴史的経験（植民地支配と朝鮮戦争という歴史的経験と、その後の父の越南と2つの家族という個人的経験）を横軸に、父ギホンの人生を追う。そこでは生活史の手法を援用し、朝鮮半島に生きた人々の歴史的経験とその生の意味に焦点を合わせる。

故人の生活史は、当人が多くの資料を残している場合は別として、その詳細を明らかにすることに困難が伴う。本稿は、故人と親しい関係にあった人々の記憶を用いており、周囲の人々の語りから本人の生活史を構成するという、一つの新しい生活史の方法となるかもしれない。また、朝鮮民族の歴史的経験とその苦難については、これまで「在日」の視線でみた植民地経験が主題にされることが多かった。その意味で、韓国人の視線でみた植民地経験の語りは、民族の経験の新たな相貌を伝えるのものとして意義がある。

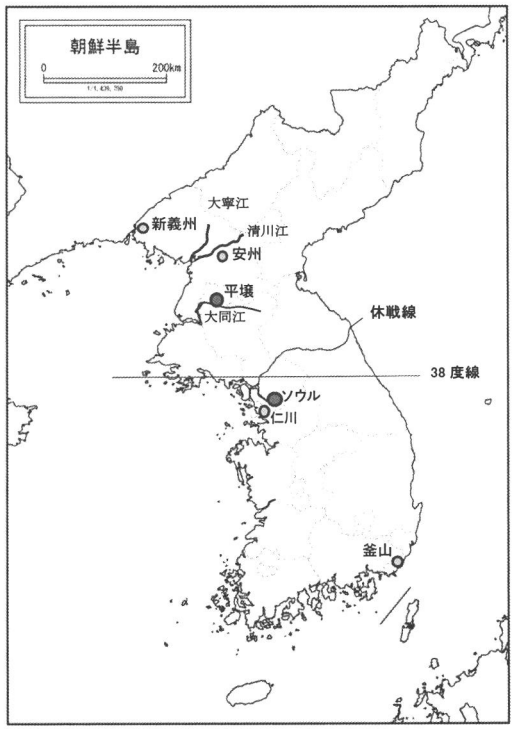
Ⅲ　2つの歴史的経験と生活史

1　祖父ジェセンの独立運動と父ギホンの反共活動

(1) 集姓村と家族

韓国では、イギリスの地図を長靴で例えるように、朝鮮半島の地図をウサギが立っている横姿に例えることがある。ちょうどウサギの口から前足の間の首の位置にあたる窪んだ所で、内陸の上からほぼ直角に流れてくる大寧江（テリョン川）と、やや緩やかに内陸の奥から流れてくる清川江（チョンチョン川）が合流し、海に流れ出ている。清川江が平安南道と平安北道の境界線となり、清川江に沿って安州平野が広がっている。安州は、川の下流域の南部に位置しており、行政区では平安南道である。安州には、安氏の中でも「順興安氏」という本貫を持つ人々が集まって村落をなしていた集姓村があり、ギホンは、そこで生まれ育った。

図（朝鮮半島地図）



日本には、世界に類のないほど苗字（姓）が多く、漢字の読み方が違うものまで入れると30万種ともいわれる[3]。韓国では、1975年の統計調査によれば、289氏[4]とされている。日本よりはるかに少ない苗字数であるが、各氏には本貫があり、同じ本貫を持つ人は一族と見なされ、1997年までは、同姓同本の婚姻は法的に禁止されていた。安氏は、韓国で17番目に多く、人口の1.4％を占めており、約20種類の本貫がある。そのうち「順興安氏」がもっとも多く、安氏全体の7割以上を占める。

ギホンは、曽祖父を中心とする親族が住む安州の「順興安氏」集姓村[5]で生まれた。ギホンの曽祖父の子どもが何人いたかは定かではないが、きょうだいの序列で一番目から四番目の家があったようである。そのうち、次男家であるギホンの祖父の一人息子として、筆者の祖父ジェセンが1902年に生まれた。祖父ジェセンには、三男一女の子どもがいて、その長男として1930年に父ギホンが生まれた。本家ではないが、血の継承を大事にする当時の社会で、ジェセンが一人息子で、その長男として生まれたギホンは大事にされたに違いない。植民地支配から解放されて間もなく、早く跡継ぎをと望む祖父ジェセンの願いで、父ギホンは18才の時[6]、２つ年上の女性と結婚して、２人の息子をもった。

(2) 植民地時代の祖父ジェセンと父ギホン

ジェセンは、朝鮮の独立運動をする団体へ資金を援助するため、当時の満洲へ列車で行き来していた。そして、その列車の中で日本の警察に逮捕され、1935年から38年まで、平安北道の新義州監營に収監された。ジェセンは大事な一人息子であり、ジェセンの父とジェセンの妻が、ジェセンに面会するために新義州まで足を運んだことを、ギホンは幼いながら覚えていた。ジェセンは、裁判の詳細は分からないが、新義州地方裁判所で第一審と第二審の裁判を受け、ギホンの祖父が家の土地の一部を売った金銭で一人息子ジェセンの保釈金を払って、ジェセンは釈放された。

ジェセンが釈放されたのは、ギホンが８歳の時で、国民学校の生徒であった。この時、幼いギホンは、祖父や母の様子から父ジェセンが収監されたことは知っていたが、何をして収監されていたのかまでは、知らなかっただろう。1942年に国民学校を出て旧制中学校に入ったギホンは、ジェセンが独立運動に協力していたことを実感させられる出来事に遭遇する。旧制中学校に進学したギホンは、親が反日行為をしたことで日本人教師から嫌がらせを受けて、学業を中断せざるをえなくなった。ギホンの学業中断は、彼の人生

に響いたようである。後年、ギホンは、勉強できる環境にありながら勉強しない人間が許せなかったのか、子どもらに「勉強しろ！」としつこく言い続けた。

(3) ギホンの反共活動と遊撃隊

ギホンは1930年生まれなので、日本の植民地から解放された時は15歳で、朝鮮戦争が勃発した時は20歳であった。

ギホンが学業を中断して２～３年後に、朝鮮半島は日本の植民地支配から解放された。しかし、祖国が解放されて浮かれたのも束の間で、朝鮮半島はソ連とアメリカの覇権争いにより北緯38度線で分断され、北はソ連の信託統治のもとに置かれ、共産主義の国になった。

その頃、安氏の集姓村で暮らすギホンの親族は、祖父ジェセンの保釈金のために田畑を売却したが、それでもかなりの土地を所有しており、地主であることには変わりなかった。ギホンは、ソ連が、地主を「小作を搾取するブルジョア」だと烙印を押して、弾圧することに我慢がならなかった。血気盛んな青年であったギホンは、その理不尽さに反発して、反共活動を行う地下組織に入り、その後、連合軍の遊撃隊に入った。そして、普段は正体を隠してゲリラ戦に加わった。

ギホンは、21歳頃には遊撃隊に所属していたと思われる。同じ村では、ギホンを含めて青年３人が遊撃隊に入った。一人はギホンの又従兄弟イクホンで、もう一人は親戚ではないが、近くの村に住む同世代のＨさんであった。しかし、遊撃隊に入ったことで、休戦後には、故郷に戻ることができなくなり、死ぬまで家族と離ればなれになるとは思わなかっただろう。

２　『韓国戦争の遊撃戦士』にみる朝鮮戦争と遊撃隊

(1) 韓国戦争の遊撃戦士

韓国戦争では正規戦と非正規戦（遊撃隊）が戦われた。1951年６月に主力戦線が膠着状態になり、米軍により編成された遊撃隊は、より活発となった。遊撃戦（guerilla warfare）とは、敵国内または敵が占領している地域で、住民により構成された集団が、粗末な装備のまま奇襲、埋伏を行う軍事作戦である。具体的な作戦として、遮断と撹乱、情報収集、心理戦、逃避や脱出等がある[7]。遊撃隊は、正規軍の一部兵力として編成される場合もあるが、

敵が占領・支配する地域で民間人が自発的に武装する場合もあった。

『韓国戦争と遊撃戦士』によれば、韓国戦争は正規戦でなされたと考えられ、戦後の研究においても正規戦が中心になった。「遊撃戦」は、「パルチザン戦」や「ゲリラ戦」と混同され、もっぱら共産党の作戦であったと思われていた。また、「特殊戦・非正規戦・特攻作戦は異なるものであり、特殊戦がもっとも包括的で、非正規戦、遊撃戦の順」であった。遊撃戦は、「韓国戦争中、民間人や軍人が敵の後方を狂乱させ、戦闘力を弱める戦闘活動を行い、スパイの情報収集活動」も行った。

遊撃隊員は最初から遊撃隊に入った人もいたが、北出身の遊撃隊員の場合は、反共活動をする中で遊撃隊に入った人も多かった。

> 戦前、北緯38度線より北では、多くの人が、ソ連の土地改革と産業国有化等の社会主義的政策に不満をもって、南下した。不満をもつが南下しなかった人の一部が、反共闘争を行ない、地下組織による武装闘争を行なった。米軍の仁川上陸作戦（1950年9月15日）が始まると、統一の日が近づいたとときめき、多くの人が米軍に入った。それがのちに、連合軍傘下の遊撃隊に吸収されていった。

このように、遊撃隊の人々は、初めから軍に属したわけではなく、訓練を受けておらず、休戦後は散らばってしまった。そのため、遊撃戦の記録もばらばらで、遊撃隊員の待遇は劣悪で、隊員の帰属意識も希薄であった。

(2) 北出身の遊撃部隊（米第8240遊撃部隊）

第2次世界大戦の後、冷戦状態が進み、米の合同参謀部（JCS）と国家安全保障会議（NSC）は、非正規戦の任務を中央情報局（CIA）に委ねた。しかし、極東軍司令部は、戦争計画の中で非正規戦を想定していなかった。朝鮮戦争が始まって、北軍に負け続ける韓国軍に、任務の軽減や武器の支給もないまま、非正規戦の部隊の編制が計画された。しかし、北から避難してきた人が故郷に戻って遊撃隊で戦う中で転向することを恐れて、計画は取り止めになった。

北の活発なゲリラ戦と中国の参戦により戦況が逆転し、韓国側が劣勢になった。そして、1950年末には北緯37度線（京畿道、忠清道）で、戦線が膠着状態になった。この時、米軍は、北出身者を使って小規模の上陸作戦を行なって、北軍と中国軍を分散させ、米軍の劣勢を改善するという計画を練っ

た。米軍は、韓国語や地形、文化の理解に欠けており、また、遊撃隊の活動の支援も困難なため、北出身の遊撃隊を使うことは好都合であった。

遊撃隊は、初めは米第８軍司令部の指揮下に置かれたが、後に極東軍司令部へ移管された。そして、1951 年７月に、第 8240 部隊が創設され、遊撃戦とスパイ戦を行なうことになり、1952 年 11 月に、駐韓ユーエン軍遊撃部隊と命名された。西海岸の遊撃隊が増加して、遊撃作戦地域が分割されることになった。しかし、北出身の遊撃隊員は、故郷の地理に詳しく、敵側スパイの識別が有利だと考えられ、地縁（地域）別に編成されることが多かった[8]。

遊撃隊の規模では、1951 年に５～６千名であったが、1953 年には約１万４千人に増えた[9]。遊撃隊員への武器や食料の補給は充分に行われず、敵の物資を鹵獲（ろかく）するか、自給自足の方針であった。給料も支給されず、戦果をあげた時に補給品が支給されるだけであった。

遊撃隊は、軍事地図なしに故郷の周辺で作戦を行って、敵の後方を遮断し、撹乱させた。訓練もなく装備も劣悪であったため、小規模の奇襲攻撃による速攻作戦（hit and run）を行った。また、敵の後方に入り、北軍兵士を射殺したり、負傷させたり、捕虜としたりした。ラジオ、チラシ、スピーカーを使った心理戦も行った。小規模な襲撃戦ではあったが、情報収集を行ったり、隊員 70 ～ 80 人で大作戦を行うこともあった。

(3) 平南部隊の「トンキ第９部隊」

ギホンが所属した「トンキ第９部隊」は、平安南道地域の平壌市、鎮南浦市（今は南浦市）、龍岡郡、江西郡等で治安活動をしていた人々と反共青年らが集まって結成された。中国軍の参戦で米軍が撤退した時、一部は米軍に従って南下し、一部は鎮南浦から漁船に乗って西海の白翎島（ペンニョンド）やチョ島、ソク島へ脱出した。その後は、脱出できなかった者や避難民を救出するために、内陸を行き来し、「北軍」[10] の武器を鹵獲したりした。

1951 年２月、米第８軍の指揮下にあった遊撃基地が白翎島に創設された。そして、西海沿岸に撤収した治安隊及び武装隊員らを遊撃部隊へ編成した。小隊の隊員は 11 ～ 12 人で、1953 年２月の隊員数は 443 人であった。部隊規模は大きいとは言えないが、部隊活動は認められていた。

おもな活動としては、北に上陸し、北軍の忌避者や元治安部隊員を帰順させて隊員を補充したり、住民を救出して隊員に編入する等した。時には特攻隊を編成し、奇襲攻撃をして、すぐ撤退して敵の後方を撹乱させた。また、白馬部隊と合同作戦を行うこともあった。

ほとんどの遊撃隊において、米軍から食糧を補給されるまでに、多くの人命が犠牲になった。また、敵と誤認されたり、誤爆されたり、二重スパイの誘因作戦に引っかかって犠牲になる人もいた。秘密維持のために、同僚の手により犠牲になる人もいた。また、接近戦であったため、遊撃隊員が犠牲になる危険が大きかった。当時の北軍の放送は、遊撃隊員が捕虜になれば、戦争捕虜ではなく、スパイ扱いで残酷に処罰すると警告していた。そのため、北軍の逮捕を避けて自決するか、脱走する中で犠牲になる人も多かった。

(4) 休戦後の遊撃隊

1953年8月、朝鮮戦争が休戦になり、米軍に所属していた遊撃隊員は、韓国の国軍に編入された。休戦線の北に残された隊員は、休戦線を突破して帰った人もいたが[11]、逮捕された人は、財産を没収されたり、家族が処罰されたりした。遊撃隊員に協力して、強制移住させられた人もいる。逮捕された遊撃隊員には、捕虜収容所に入れられ、休戦後に帰還できた人もいる。いずれにせよ、多くの犠牲者が出た。

休戦後、朝鮮半島の統一の夢が破れた遊撃隊員は、士気が落ち、遊撃隊から離脱する者もいた。遊撃隊に残った隊員は、韓国軍に編入されたが、その際、一人ひとりの遊撃隊員の功績が評定されて、待遇が決められた。しかし、北出身の遊撃隊の作戦は小規模で秘密裏に行われたため、その功績がきちんと評定されず、不満をもつ人が多くいた。北出身の遊撃隊員の活動を証明できる書類も、散逸していた。北にいる家族に被害が及ぶことを恐れて活動の証言を拒む者もいた。

『韓国戦争の遊撃戦士』の最後は、「同族同士の戦争はふたたびあってはならない」、「遊撃隊の研究は、異民族との闘争であった日本植民地支配下の独立運動史の研究よりも困難である」という言葉で結ばれている。

3　越南と二つの家族

(1) 父ギホンの越南

父ギホンが反共活動をし、遊撃隊に入ったという情報は、共産党にも伝わり、家に帰ることができなかった。家族に会い、食糧を調達しようと思って実家に立ち寄っても、共産党の公安に捕まることを恐れた。家族も、ギホンに早く逃げることを勧めた。

ギホンは遊撃隊員の任務として、平壌の工場で正体を隠して働きながら情報を入手し、無線で伝えた。正体がばれそうになると、身を隠し、また平壌に出て別の工場で働いた。

1953年7月の休戦直後に、北の多くの人が南に向けて移動した。休戦が決まって、南へ向かう道は閉鎖されたが、警備は厳しいものではなく、多くの人が南へ向かった。その後、境界線の警備が厳しくなった、ギホンは、「南へ向かうなら、これ以上時期を延ばすとむずかしい」と判断した。そして家族の元に戻って、いっしょに南へ行こうと誘った。しかし家族は、「家族みんなが南に行くまでの苦難に耐えることはできないだろう」と考えた。そして、家族は北に残ることにし、ギホンだけでも南へ行くことを勧めた。家族としては、「一人でも南へ行き、子孫を繋げてほしい」という願いであった。ギホンは、反共活動をし、遊撃隊に入った自分が北の地で生き残る道はないと考えた。そして家族の勧めどおり、南へ向かう人々に混じって南へ向かった。

ギホンが南へ向かったのは、休戦の年の真冬であった。途中で大同江（テドン川）[12]を渡らなければならなかった。橋はすべて爆破されており、人々は凍り付いた川を歩いて渡ろうとした。川の浅い所は水深まで固く凍り付いていたが、深い所は上の方は凍っていても底までは凍っておらず、氷が割れて川に落ちる人が多かった。落ちた人を助けようとして、氷の上でバランスを崩し、いっしょに川に呑み込まれる人もいた。

ギホンは、大同江を渡る途中で引き返した。川に落ちて死ぬ人を見て、これ以上進んだら、自分の命も危ういと判断した。こうして南行きを断念したギホンは、平壌に戻り、工場で働きながら、大同江の下流の北側で、月1度救助に来ていた遊撃隊員との接触を試みた。それは命がけのことであった。北側の監視があると、救助隊は、ギホンらとの接触を諦めて引き返した。ギホンは、休戦3年後にようやく救助隊との接触に成功し越南することができた。

(2) 二つ目の家族

ギホンは、休戦3年後にようやく越南に成功した。休戦後、遊撃隊は韓国の国軍に編入されていたが、南へ着くのが遅かったギホンは、仁川に駐屯していた連合軍の部隊に配置された。しばらく米軍の部隊に勤務したギホンは、連合軍が撤退する時に、イギリス軍の将校からイギリスに行こうと進められたが、北の故郷に妻子や親を残していたギホンは、韓国に残った。その後も、

仁川を離れなかった。統一の見通しがないと思ったギホンは、知り合いの仲介で、仁川港の前にある島出身の女性といっしょになった。ギホンは、新しい家庭を作っても、いつかは故郷に帰りたいという思いで、休戦線に近い仁川を離れることができなかった。そしてそこで生涯を終えた。

父ギホンの子は、4女1男であった。ギホンの妻は、北に夫の妻がいること、息子がいることを知っていた。そして、「南北が統一したら、夫は北に帰るかもしれない」という不安から、夫の跡継ぎの息子を産みたいと思っていたかも知れない。しかしギホンは、北に残してきた妻や息子のことは口をつぐんだまま、仁川でその後の生涯を送った。

ギホンは、単身で南へ来て田舎出身の女性といっしょになったが、南で支えてくれる人も資源もなかった。事業の才もなく、何回も事業を始めるが、みな失敗し、生計や子の教育は、妻の苦労の上で成り立っていた。

4　親族との再会そして死

(1) 離散家族さがし

韓国では、朝鮮戦争で南に避難する民族大移動の混乱期に離ればなれになってしまった人々の人数が1千万人とも言われる。全国民の4分の1が離散家族ということになる。

戦争が終わっても、人々は、生活に追われて、1960年頃までは家族をさがせない状態が続いた。また、家族をさがす広告を新聞に出しても、戦争の中で教育を受けることができず、字が読めない人が多かった。さらに、テレビや電話は、富裕層のもので、当時の大衆の通信手段は限られていた。

生活が落ち着いた1970年代になり、ようやく人々は家族さがしを行えるようになった。ちょうどその時期に、大韓赤十字が離散家族さがしの活動を始めた。ソウル市を東西に流れる漢江（ハンガン川）の西側にある中島の汝矣島（ヨイド）広場に、多くの人々が集まり、さがしたい家族や自分についての情報を紙に書き、至る所に貼りつけた。

汝矣島は、植民地時代に空港として使われ、戦後も1971まで、民間・軍事の飛行機の滑走路として使われていた[13]。その後は、一部が汝矣島広場と汝矣島大路になり、政府関係の催しの場ともなった。

1970年代初め、大韓赤十字が離散家族さがしを始めると、その広場に離散家族をさがしたい人々が集まってきた。人々は、汝矣島の広場に「人さがし」の手書き紙を貼りつけた。広場は、たちまち人々で埋め尽くされた。そ

こには、北から避難してきた人だけではなく、戦時中に何らかの事情で韓国内で離ればなれになった人々も集まった。

1980年代になると、テレビや電話が民衆に普及し、都会では、各家庭がテレビや電話をもっていた。その頃、国営放送のKBSが、「誰かこの人を知りませんか」という生放送をした。1983年6月3日であった。最初は3時間の生放送の予定だったが、人々が殺到したため、その後のすべての番組放送を中止し5日間連続して生放送を続けた。視聴率は、78％という高視聴率を記録した。汝矣島を訪れた人は約5万人で、約500人の離散家族が再会できた。

その後、KBSは定期的に離散家族さがしの番組を組み、同年の11月14日までに453時間45分間の生放送をした。これは、単一主題での世界最長時間連続生放送として、2015年にユネスコ世界記録遺産に登録された。この期間中に離散家族さがしの受付は100,952件に上り、約1万人が再会できた[14)]。

番組の最初に、ペティキムの「誰かこの人を知りませんか」というバックミュージックが流れ、デビューしたばかりのソルンドの「忘れられた30年」という曲が一躍有名になり、離散家族さがしのプログラムのおかげで、最短期間にヒットした曲としてギネスブックにも登録された[15)]。

(2) 親族との再会

ギホンには、韓国の親戚は、釜山にいる又従兄弟イクホン1人だけだった。1970年代まではそうであった。ギホンは、北にいる家族の消息を知りたいと思い、汝矣島に何度か足を運んでいた。その願いが届いたのか、同じ故郷出身の人と連絡が取れ、その繋がりで又従兄弟にあたるジェホンと連絡がとれた。そして、ギホンの家で再会することになった。この日のために、ギホンは釜山のイクホンも呼んだ。

ギホンの父ジェセンが一人息子なので、男性血統上の親戚だけをみると、ギホンに従妹はいない。それぞれの祖父同士が兄弟で、ギホン、イクホン、ジェホンはたがいに又従兄弟となるという。ジェホンの家が本家にあたるが、3人の中でギホンが最年長ということで、ギホン家に集まることになった。ギホンの家族が7人、釜山のイクホンの家族が5人、新たに連絡が取れたジェホンの家族が5人の総勢17人が、ギホンの家に集まった。その後は、冠婚葬祭の時にたがいに行き来していた。

(3) 南北離散家族の再会放送

1985年、ソウルと平壌で芸術講演が行われた。それとともに、南北間の離散家族同士の故郷訪問団が行き来した。その後も南北の離散家族の再会は続いていたが、1996年に、北の工作員が潜水艦で韓国側水域に侵入した事件で、南北関係が緊張状態となり、中断された。その後、金大中政権の2000年に南北正常化会談が行われ、南北の離散家族の訪問が本格的に再開された[16)]。テレビは連日、再会の場面を放映した。

テレビでその様子を見たギホンの娘（筆者）は、父のことが浮かんだ。「親となって親の気持ちが分かる」という言葉にあるように、親の立場になって、父が北に残してきた子にどんな気持ちでいるのだろうかと、父の気持ちを察することができるようになった。

筆者は、ギホンに電話して、「離散家族再会の申請はしたの」と聞くと、ギホンは、「していない」と言う。「どうして」と聞くと、「北の家族はもう死んでいるかも知れないし、生きていても、こっちから申請すると、あっちの家族の身辺が危うくなる」と言った。筆者は、ギホンの言うことがすぐには理解できなかったが、ギホンの状況に思いを馳せ、ようやくその意味が分かった。ギホンは、南側の遊撃隊に入り、南に越境して来たのである。「敵側についた人の家族が無事に過ごすことができただろうか」ということに、思い至った。

筆者は、「息子に逢いたいでしょう」と聞いた。ギホンは、何も言わなかった。まさか娘からそのようなことを聞かれるとは、思いもしなかったのかも知れない。または、北に置いてきた息子を思い、申し訳ない気持ちが押し寄せて言葉が出なかったのかも知れない。ギホンは、少し間をおいて、「インチュリ（南にいるギホンの息子）が小さい頃の北の息子によく似ていた」と呟やいた。ギホンが北に残してきた2人の息子のことを話したのは、これが初めてであった。

ギホンは、しばらく何も言わず、やっと言葉をつないだ。「このことはお前の母に言って分かって貰えるわけでもない。誰に言ったって分かって貰えるわけでもない。俺の胸に収めて（離散家族再会の）テレビを見ているだけだ」と。そして、またしばらく沈黙が続いて、電話が切れた。

(4) ギホンの死

ギホンは、2007年4月に亡くなった。享年77歳であった。ギホンの通夜

には、ギホンの又従兄弟ジェホンと、ジェホンをギホンにつないでくれたHさんが来てくれた。釜山の又従兄弟イクホンは体調が悪く、息子が代わりに来てくれた。

ギホンの葬儀に参列したジェホンは、ギホンの葬儀で泣いた。「もっと兄貴に逢いに来るべきだった。一人で南に避難して、子どもらと生きるのに精一杯で、四六時中仕事に追われて、兄貴に会いに来れなかった。それでも時間を作って兄貴に逢いに来るべきだった。身内は、兄貴と釜山の兄貴しかいないのに。ごめんなさい。ごめんなさい」と繰り返し、泣き続けた。ジェホンが嗚咽する姿を見て、ギホンの家族も貰い泣きをした。

落ち着きを取り戻したジェホンは、ギホンの子らの前で、北の親戚について自分の知っていることを話した。

> 安氏の集姓村に、近い親族として4つの家があった。祖父同士が兄弟関係にあり、序列で一番上の家が私の家で、ギホン兄貴の家が二番目、釜山のイクホン兄貴の家が四番目だった。私の家の隣に飛行場ができて、戦争になると危ないと思い、12歳の時に、長男である私だけが母の実家のある江原道の平康郡に疎開した。それから朝鮮戦争が起こり、16歳の時に母系の祖父といっしょに南へ避難してきた。そんなわけで、北の故郷で、5つ上のギホン兄貴や3つ上の釜山のイクホン兄貴と遊んだ記憶はあるが、他の親戚のことはよく知らない。

ギホンの葬儀に参列したHさんは、ギホンと釜山のイクホンと3人で、遊撃隊の活動をした人であった。Hさんは、ギホンと同じ村に住んでおり、ギホンの家族について詳しかった。Hさんは、ギホンの子ら5人きょうだいを見回しながら、「ギホンには妹と2人の弟がいて、ギホンの息子はギホンの上の弟に似ていて、ギホンの三番目の娘（筆者）はギホンの妹に似ている」と言った。そして、彼が遊撃隊に入った時のことを話した。

> 21歳の時に村を出て、遊撃隊に入った。翌年、自分の村の近くに南のスパイだった人がいたので、「自分は元気でいる」と家族に伝えてほしいと頼んだ。その人が、20日間の任務を終えて帰って、「Hさんの家族はみんな逮捕された」と知らせた。同じ遊撃隊の人の中には、家族全員銃殺されたという話も聞いていたので、自分の家族も殺されたのではないかと思っている。

Hさんの家族の話を、ギホンは聞いていたはずである。そのため、南北の離散家族再会に申請せずに、ただテレビにくぎ付けになるしかなかったと思われる。

Ⅳ　歴史的被害経験と被害意識の変遷

1　被害経験と被害意識

(1) 日本の植民地支配

ギホンは、日本の植民地支配が始まって20年になる、1930年に生まれた。植民地支配の下で成長し、日本の軍国主義教育を受けた。

日本の総督府は1930年代に、「文盲退治」を掲げて、朝鮮半島各地に学校を建て、子どもの教育に力を注いだ。総督府は、学校で朝鮮語使用を禁止し、大日本帝国の手足となって朝鮮民族を操る人材を育てるため、朝鮮人の子らを日本臣民にするという、軍国主義教育を徹底させた。朝鮮の子が懸命に勉強しても、日本臣民になれるわけではない。しかし、朝鮮民族の青少年たちは、「完全な日本人になることだけが、韓民族が生きる唯一で最善の選択」と考えた。そして、懸命に日本の軍国主義教育を学んだ[17]。

祖父ジェセンは、独立運動の団体に資金を援助した罪で3年間収監された。家族は、土地を売って保釈金を工面した。ギホン少年には、その意味が分からなかっただろう。ギホンは、軍国主義教育を受けて、日本臣民になろうとしていた。しかしその時、日本人教師の嫌がらせを受けた。それは、まっしぐらに軍国少年になろうとしていた自分を振り返る出来事になったと思われる。

2017年に上映された『雪道』[18]という映画がある。時代背景は1944年頃である。父が創氏改名しなかったために、旧制中学校に通っていた息子とその妹は、学校で嫌がらせを受けた。そして息子は徴集され、娘は「慰安婦」とされたという話である。ギホンが旧制中学校に入ったのは1942年であり、この映画の時代背景と近い。ギホン少年も、日本人教師から嫌がらせを受けた。

当時、誰もが旧制中学校に入れたわけではない。子どもたちは、旧制中学校が「日本人になる」第一歩と考えていた。ゆえに、学業が中断されることは、出世の梯子を外されたにも等しい。それは、ギホンの挫折感を生んだと

思われる。

朝鮮半島で国民徴用令が出されたのは1939年であった。20歳の男子が徴用または徴兵された。1940年代にはその年齢は下がり、植民地支配がもう少し続いていたら、ギホンも、徴用または徴兵されていただろう。

(2) 民族の分断

ギホンが15歳の時、朝鮮半島は日本の植民地支配から解放された。しかしそれは、手放しに喜べるものではなかった。朝鮮半島は、第二次世界大戦が終わって、冷戦の前線として38度線で分断された。その38度線とは、日本の植民地時代には、その南は大本営が、北は関東軍が管轄していた。すなわち、38度線で分断しやすい構造がすでに作られていた[19]。そして、北では、ソ連の共産主義による信託統治が、南では、民主主義を掲げたアメリカの信託統治が始まった。

北において共産主義が浸透すると、ギホンの家族は、地主として「ブルジョア」のレッテルを貼られた。そのことが納得できないギホンは、反共活動に参加し、後に国連の遊撃隊に加わった。

朝鮮戦争は、普通の戦争ではなく、「民族同士の殺し合い」であった。朝鮮民族は、敵と味方に引き裂かれて、苦しむことになった。また、戦線が北から南へ、南から北へと何度も移動した。<表>の▼印は、戦線が北から南下したこと、▲印は、戦線が南から北へ北進したことを表わす。さらに▼▲印は、戦争が激化して戦線の動きが激烈であることを表わす。最初は北軍が、南の釜山を残して朝鮮半島全域を一気に占領し、その1ヶ月後に、アメリカのマッカーサーが、仁川上陸作戦を行い、中国との国境近くまで北進した。しかし10月になると、中国の「義勇軍」20万人が参戦し[20]、戦線は南下する。マッカーサーは、その責任を取って1951年4月に解任され[21]、その後、戦争は長期化した。現在の軍事境界線の近くで戦線が何度も上下し、朝鮮戦争が始まって3年1ヶ月後に、休戦に至った。

戦線が移動するたびに、民族大移動が続いた。故郷を離れたくない人もいた。村に残った人が、近隣の人の動向や政治の話をしたところ、敵と見做され、処刑されることもあった。戦線が動くと、敵と味方が入れ替わる。そのようなことが繰り返された。そして、人々が犠牲になり、生き残った人々も、精神が壊され、村の誰もが信じられなくなる。そのような戦争であった[22]。

ギホンが遊撃隊に入った直接のきっかけは、家族が「ブルジョア」と烙印されたことであったが、彼の反抗精神の根底には、植民地時代に受けた心の

傷が癒やされていなかったことがある。「父ジェセンが独立運動に加わっていなかったら」、「学校で嫌がらせを受けなかったら」、「学業を中断しなかったら」と仮定しても、ことの本質は分からない。問題は、祖国の主権が、日本であろうとソ連であろうと、外国に奪われていたという被害経験にある。その被害を回復するために、（たまたま）共産主義であった体制へ反発して遊撃隊に入ったということである。半日と反ソ連という、一見異なる歴史的経験であるが、ギホンの中では繋がっていた。

2　被害経験がもたらしたもの

(1) 精神的貧困と物質的貧困

国連軍の遊撃隊に入ったギホンは、故郷に残ることができず、越南せざるをえなかった。祖父母や両親、妻子と離ればなれになった。

1970年代に、韓国の離散家族さがしで、多くの人が、家族との再会を願って、汝矣島に集まった。しかしギホンは、家族再会の期待ももてないまま、故郷の人々に会えないかと、ソウルの汝矣島に出かけた。その侘しさには、家族と会いたいという気持ちと、家族を置いてきたことへの罪意識が混じっていただろう。

2000年代の南北離散家族さがしの時も、北に置いてきた家族は、殺されたかも知れない、生きていても、自分のせいで家族に被害が及んだかもしれない。このような思いを、南でつくった家族に打ち明けることもできず、ひとりで耐えていたのだろう。つまり、ギホンは、そのような深い歴史の傷を抱えて生きていた。

そのうえ、ギホンは、家身一つで越南したため、支えてくれる人もおらず、経済的資源[23]ももたなかった。土地を持つことは、北の共産主義体制では、「ブルジョア」と見做されたが、南の資本主義社会では生計の資源となる。戦争で朝鮮半島が焦土になっても地主は地主であり、土地は生きる資源になったはずである。つまりギホンは、精神的にも経済的にも、貧困の状態に置かれた[24]。これは、イクホンがギホンの葬儀で、「一人で南に避難して、子どもらと生きるのが精一杯で、財産も何もなく、四六時中仕事ばかりしていた」とむせび泣いたことでも分かる。

(2) 先祖のチェサ

韓国では儒教思想が強く残っており、長男の家で先祖が亡くなった日の前夜に「チェサ」(祭祀)を行う。また、韓国の二大節句である「正月」と「秋夕」(旧暦の1月1日と8月15日）の早朝に、家族の健康や繁盛を願って食事を供えて先祖を供養する「チャレ」（茶禮）という儀式がある。それが子孫として生まれた者の義務であり、自分の子孫の繁栄をも願って行われた。近年は、キリスト教の浸透により、そのやり方は多様化した。

ギホンは、長男でありながら、「チェサ」を行ったことがなく、「チャレ」だけ行っていた。最初は、ギホンの祖父母の食事だけ供えていたが、1970年代の後半からは、両親の食事も供えるようになった。祖父母の供養をいつ頃始めたのかは分からないが、ギホンが越南した頃は、祖父母は生きていただろうから、祖父母が亡くなったと思い始めた頃から「チャレ」を行ったのだろう。その後、両親も亡くなったと思ったのだろう。ちょうどその頃、ギホンは、故郷のだれかに会えないかと思って、汝矣島に出かけ、そこでかつての遊撃隊の同志Hさんに会った。そして、Hさんの家族の話を聞いて、自分の両親も亡くなったと思い、両親への供えを始めたと思われる。

(3) 終わらない戦争

朝鮮戦争は1953年に「休戦」したが、「終戦」したわけではない。「休戦」とは、いつ戦争が始まるか分からない状況であり、人々は、いつまた起きるか分からない戦争に怯えることになる。戦争への怯えは、南では「アカ」への恐怖となる。政治家は、権力維持のために人々の怯えを利用し、果ては独裁の道具とした。国民の間に政治への不満が高まると、政治家は、「アカ」を持ち出して、警戒心と愛国心を煽ってきた。その手法は成功し、韓国では1980年代まで軍事独裁政権が続いた。

そのような政治状況の中で、ギホンは、「南の学生運動は北が扇動している。運動の連中はみんな『アカ』だ」と思っていた。ギホンのような人は、政権にとっては都合のいい国民であった。人々は、政権批判どころか、「アカ」を排斥し、理屈抜きで政府を支持した。それにより、権力は、強固な保守基盤を堅持してきた。

ギホンは、戦争と「アカ」を同一視した。そして、家族再会の機会を奪ったのは、戦争であり、共産主義であると思った。ギホンの喪失感は、被害意識となり、彼の人生の方向を決定していった。しかしそれは、つらい人生であった。

V　まとめ

朝鮮半島が日本の植民地支配を受けていた時期に、祖父ジェセンは、朝鮮の独立運動に関わった。父ギホンがそのことを身をもって認識したのは、中学校で日本人教師の嫌がらせを受けた時であった。朝鮮半島でも、軍国主義教育が行われ、軍国少年が育っていた。祖父ジェホンの期待とは裏腹に、父ギホンは、中学校を中退した時は、日本人への道を阻まれた程度にしか思わなかったかも知れない。朝鮮の軍国少年は、朝鮮半島の植民地が続くと思っていた。それが、突然解放された。しかし、その解放の喜びも一瞬にして終わった。

戸惑う少年らは、民族解放の喜びに浸る間もなく、共産主義に呑み込まれた。そして、「ブルジョア」の烙印を押されたギホンは、反共運動に向かった。しかし、その抵抗の原因は、植民地時代に学業を中断させられた経験に遡る。こうしてギホンは、植民地と民族同士の戦争の傷を抱えて、南の世界で寂しく生き、人生を終えていった。

韓国では、保守派が強い支持基盤を持っている。それは、ギホンのように、朝鮮戦争の経験から「アカ」への恐怖感を刷り込まれ、洗脳され続けた人々からなる。

他方で、今日の韓日の歴史問題の根底には、韓国の人々を今なお苦しめている植民地と戦争の傷がある。日本が植民地支配をしっかり反省し、民族同士の戦争になってしまった傷を抱えているということを重く受けとめたうえで韓国と接しないかぎり、韓国人の傷が癒されることはない。朝鮮半島では、植民地と朝鮮戦争は、まだ続いているのである。

注

1)『韓国戦争の遊撃戦士』では、朝鮮戦争は、「韓国戦争」とされている。朝鮮戦争の英語表記は「The Korean War」であるが、韓国では「The Korean」が「韓国」と訳されて、「韓国戦争」になる。本稿では、「朝鮮戦争」の語を用いるが、当書の内容を紹介する際は、「韓国戦争」と呼ぶ。

2) 父は、毎日ではないが、５～６行程度の簡単な日記を書いていた。

3) 丹羽基二は、『日本姓氏大辞典』(1985) に十数万種の名字を収め、その後も採集を続けて、『日本苗字大辞典』(1996) を刊行した。そこでは、漢字の読み方の違いを含めて、30 万以上の名字があるとしている。

4) 韓国では、姓氏調査が 15 年おきに行われている。1975 年調査では 289 種類であったが、2015 年調査では 5,582 種類であった。それは、韓国籍取得者が増えたことによると考えられる。

https://blog.naver.com/nong-up/221211581895、2019年9月30日閲覧)

5) 順興安氏が集姓村に住んだのは、本貫の「順興」という地域がある慶尚北道に多いが、北にも二ヵ所あり、その一つが黄海道であり、もう一つがギホンの故郷、平安南道の安州である。

6) 韓国では数え年を用いており、18歳とは満17歳になる年をいう。

7) 陸軍本部,1972,『軍事評論――戦術研究参考』238-242項,金クァンソク編,1993,『用兵述語研究』385-386項。

8) 北出身の遊撃隊は、全員トンキ部隊に所属しており、地域別に見ると、黄海道がトンキ1、2、3、4、7、8、10、11、13部隊、平安南道が九部隊、平安北道が14と15部隊となっている。

9) 女性遊撃隊員は39名で、避難民と島々の住民の子どもの教育や敵の監視、情報収集などの活動をした。

10) 北朝鮮の軍をいう。北朝鮮では、北朝鮮を「北朝鮮」、韓国を「南朝鮮」と呼び、韓国では、北朝鮮を「北韓」、韓国を「南韓」「韓国」と呼ぶ。そして、北の軍を「北韓軍」「共産軍」、韓国の軍を「国軍」と呼ぶが、本稿では、北朝鮮の軍を便宜上、「北軍」と呼ぶ。

11)『韓国戦争と遊撃戦士』によると、休戦後に北に残された遊撃隊員が南に来たのは20名で、そのうちトンキ部隊所属の人は5名だけと言う。多くの遊撃隊員が、北に残されたまま犠牲になったと思われる。ギホンは、休戦3年後に南へ来たが、この人数に含まれているかどうかは不明である。

12) 朝鮮半島で5番目に大きく、水深が深い川で、平壌市を経て南浦に流れ、西海に注ぐ川である。

13) 1916年、日本が軍事目的で簡易飛行場を建設し、満州・朝鮮・日本を繋ぐ航空需要が増えると、1926年に飛行場を拡張して汝矣島空港になった。戦後も空港として使われていたが、1958年に民間機の使用を止め、1971年に空軍基地が移転されて、空港は閉鎖された。汝矣島内には、国会議事堂や証券取引所等の重要施設や各放送局があり、市庁がある市の中心部と合わせて。ソウルの中心をなす場所であった。(「ナムウィキ」2018年10月14日参照)

14) ナムウィキ「離散家族をさがします」,ホームページ (2019年10月12日閲覧)

15)「〔韓国歌謡年代史〕143」,ホームページ (2019年10月11日閲覧)

16) 南北の離散家族の再会は、盧武鉉政権まで比較的順序に行われた。2008年に、北の核開発問題で南北は緊張関係に入り、離散家族の再会は膠着していた。2014年に小規模で行われるが、また緊張関係に入った。2018年の南北の板門店宣言を記念して、8月22-26日に再開された。(ナムウィキ、ハンギョレ新聞　2018年8月22日閲覧)

17) 郭貴勲,2016,『被爆者はどこにいても被爆者』井上春子訳,18頁.

18) 監督イ・ナジョン、脚本ユ・ボラ、主演キム・セロンとキム・ヒャンギ、121分、2017年制作

19) ウィキペディア＜38度線＞,ホームページ(2020年9月27日閲覧)による。李圭泰,1992,「連合国の朝鮮戦後構想と三八度線」393-406項、関寛治,1984,「分断の責任――米ソ冷戦は何をもたらしたのか」.

20）後方を入れると、「中国人民願軍」100 万人といわれる。

21）マッカーサーは、中国軍の投入はないと楽観して、その対策を講じなかった。

22）2019 年 3 月 21 日、「第九条の会ヒロシマ」主催の「結成二七周年記念集会＆総会 2019」で崔真碩さんが、講演会（「韓国キャンドル市民革命から東アジアの平和へ―憲法九条を東アジア化する」）でも話されていた。

23）安錦珠 , 2016,「在日高齢女性の社会的孤立――在日集住地域の通所介護施設を事例として」『部落解放研究』22 号 ,103-126 頁.

24）金澤悠介は、「社会関係資本を保有できないことで、社会生活に不利益が生じる」とした。「社会関係資本からみた社会的孤立」辻竜平・佐藤嘉倫編、2014,『ソーシャル・キャピタルと格差社会――幸福の計量社会学』東京大学出版会、137-152 頁.

文献

安錦珠, 2016,「在日高齢女性の社会的孤立 -- 在日集住地域の通所介護施設を事例として」『部落解放研究』広島部落解放研究所 22 号.

韓国国防部 , 2003,『韓国戦争の遊撃戦士』韓国国防部軍事編纂研究所.

丹羽基二、1985、『日本姓氏大辞典』角川書店.

丹羽基二、1996、『日本苗字大辞典』芳文館.

https://blog.naver.com/nong-up/221211581895、＜韓国姓氏調査＞（2019 年 9 月 30 日閲覧）

『ナムウィキ』＜大同川＞ホームページ（2018 年 10 月 14 日参照）

『ナムウィキ』「離散家族をさがします」ホームページ（2019 年 10 月 12 日閲覧）

「〔韓国歌謡年代史〕143.」ホームページ（2019 年 10 月 11 日閲覧）

『ナムウィキ』＜南北離散家族＞ハンギョレ新聞　2018 年 8 月 22 日閲覧）

郭貴勲 , 2016,『被爆者はどこにいても被爆者』井上春子訳 韓国人被爆者・郭貴勲手記出版委員会

『雪道』, 2017, 監督イ・ナジョン、脚本ユ・ボラ、主演キム・セロン、キム・ヒャンギ、

『ウィキペディア』＜ 38 度線＞（2020 年 9 月 27 日閲覧）（『世界』1984 年 8 月号、49 頁.

金澤悠介 ,2014,「社会関係資本からみた社会的孤立」辻竜平・佐藤嘉倫編 ,『ソーシャル・キャピタルと格差社会――幸福の計量社会学』東京大学出版会

（あん・くんじゅ　社会理論・動態研究所）